
Loop

霧本ユエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOOP

【Nコード】

N8595F

【作者名】

霧本ユエ

【あらすじ】

突然の不思議な出来事を境に2人の少年少女は真実を知ることになる。果たして彼らの運命は・・・・？

運命は廻り
つづける。永遠に。

1・Start

これはなに？あれはだれ？
すべてはなんのためにそんざいするの？

1・Start

「遅い」

よく晴れた朝。肌に心地良い程度の風が吹き、小鳥も陽気にさえずっている。

そんな日には不釣り合いな光景がとある家の前であった。その家の前でしかめっ面でたたずむ少年が1人。目、髪ともに赤みがかつた茶色で、その両目は目の前の家のドアをにらみつけるように見つめていた。

彼の名前は宮琥 愁。この家の住人の幼馴染である。

待ち合わせをしていたが、相手がなかなか出てこないことに少々いらだっているのであるうか、彼のきつく組まれた腕がほどかれる気配はない。

ドタッ バタッ

激しい音が聞こえ、次の瞬間、家のドアが開いた。

「お、おはよう」

少々どもりながら挨拶した少女。黒髪を腰まで伸ばし、髪と同様に黒い目は朝早いものにもかかわらず大きく開かれている。

彼女の名前は椎平 瑠璃。現在進行形で愁を待たせている張本人である。

「まったく、何十分待たせれば気が済むんだ？」

「ごめんごめん。でも女の子はいろいろとあるのよ?」

「どこが女だよ・・・」

「なあに?なんか言っただけ?」

愁がブツブツ呟いていると、瑠璃が何か裏があるようなとびつきの笑顔で聞いてきた。怒らせるとやっかいだということは重々承知なので、愁はすぐに話を変えた。

「今日はどんなことするんだろう?」

「私に聞かないで師範に聞いたら?」

案の定、寝起きすぐの状態も手伝ってか、瑠璃は機嫌を損ねたようだった。

2人はこれから空手道場に行くところ。2人とも幼いころから空手を習っていて、そんじょそこらの人間はよりはそれなりに強いはずである。特に瑠璃のほうは5歳のときに「ちびっこ空手選手権」で初出場ながらもチャンピオンの座を獲得した猛者で、もちろん今もその腕は健在である。また、愁も負けじと練習を積み重ね、今では2人が通っている道場の中でも一目置かれる存在となっていた。

これ以上瑠璃の機嫌を損ねないようにと愁が気を使っているうちに道場に着いた。

いつもの練習メニューをこなした2人は、師範の話を聞いてから学校へ行く準備をした。

2人はいつも朝早くから道場で練習し、終わると道場から学校に行っている。学校は道場からそれほど遠くもないのですぐに着くのである。

2人が学校に着くと、もう、ちらほらと人が来ていた。

着くとすぐに、愁は授業の準備をした。

瑠璃はといえば登校して早々寝ようとしてる。

「何やってんだ!??」

「今から寝るの。先生来たら起こして」

そう言い残し、瑠璃は夢の世界へ旅立っていった。

偶然か必然か　　まあ彼らにとってはどうでもいいことなのだ

が　　愁と瑠璃は隣の席なので、瑠璃を起こす役目は必然的に愁に回ってくる。

愁はため息をつき、先生を待った。

今日も1日が始まる・・・・・・。

2・Mysterious lights

なぜか

呼ばれたような気がした

2・Mysterious lights

その日も平和で普通の日だった。普通に授業を受けて、普通に友達と話して、何事も無く1日が終わる。そんな日。

しかし、瑠璃の心は穏やかではなかった。何故か その何故かは分からないが 落ち着かない。背筋が凍るような悪寒がしたかと思えば、急に安心する温かさ。

原因不明の不調が瑠璃を不安にさせた。

そんな瑠璃の異変に気づいた愁がどうしたのか聞いても、瑠璃は首を横に振るだけ。

そんな状態が放課後まで続き疑問が深まったのか、ついに愁が問いただした。

「いったいどうしたんだ！？顔色悪いぞ？」

「分かんない。だけど、何か変」

「変？熱でもあるのか？」

「違う。何かそういうのじゃなくて、何か………妙っていうのかな。周りや自分がいつもと違う感じ」

そう言われた愁は首を傾げるばかりだった。しかし、瑠璃でさえもよくわからないものを説明できないのも無理はなかった。

そうこうしている間に瑠璃の家に着いた。そこで2人は別れ、瑠璃は家に入っていった。

瑠璃が家に入ると、保護者が温かく迎えてくれた。瑠璃は幼いこ

ろに両親を亡くし、それから彼女と住んでいる。

「お帰り。あら、顔色悪くない？具合でも悪いの？」

「大丈夫よ。それより、マリーのほうが顔色悪いわ」

瑠璃の保護者 マリーは、瑠璃の父親の親戚で、瑠璃の両親

親が一番信頼していた人物だった。

彼女は、瑠璃を引き取った後、瑠璃が物事の分別がつくようになってから両親のことをいろいろ聞かせた。………どのよう

に生き、どのように死んだかを。それからは、2人とも信頼しあい、まるで姉妹のようだと近所でも評判の“家族”であった。

「また徹夜？」

「まあね。昨日、やっと原稿が出来たのよ。早く郵送しなくちゃ」

マリーは名前からも分かる通り、純粋な日本人ではない。彼女は、イギリス人と日本人のハーフで、幼いころはイギリスに住んでいた。そのことを生かして、今は翻訳の仕事をしている。

「徹夜明けならなおさら休んだ方が良くない？夕食の支度は私がやっておくから」

「これくらいでへこたれてたらこの仕事続かないわよ。瑠璃だって体調が悪いんでしょ？夕食までの間くらい寝てたら？」

「大丈夫って言うてるでしょ？こっちこそこれくらいでへこたれてたら学生なんてつとまりませんから」

「それもそうね。それじゃあ少し早めに食べて、いつもより早く寝られるようにしましょうか」

少し疲れた様子で微笑みながらのマリーの提案に瑠璃はすぐうなずき、用意を始めた。

いつのまにか寒気はしなくなり、夕食作りを始めたためか、原因不明の違和感のこと忘れ、マリーと他愛のない話をして楽しんだ。

その後、瑠璃は原因不明の不調の話には触れることもなく、マリーの提案どおり、いつもよりは少し早めだったがもう寝ようとベッ

ドに入った。

しかし、ベッドに入った途端、先ほどまでおさまっていた“異変”が瑠璃を襲った。瑠璃は懸命に寝ようとしたが、固く目をつぶればつぶるほど目がさえてしまい、とても眠れない。ついにはベッドから起き上がってしまった。いつのまにか汗もかいていて、どれほど追い詰められていたかが自分でもわかり、さらに恐ろしくなった。

ふと窓の外を見ると、そこには奇妙な光景が広がっていた。

どこか遠くのほうで光が発せられていた。緑色の細い筋のように伸びたそれは、地上から空へ突き抜けるようにして発せられている。

その光を見た瞬間、先ほどまでの“異変”が嘘のように消えた。

そして、名前を呼ばれたような気がした。

3・Waiting person

少しずつ日常が崩れ始める

3・Waiting person

愁は瑠璃の不振な行動に首を傾げるばかりだった。しかしタチの悪い風邪だろうと、愁はあまり気にしないことにした。

家に帰ると、目を輝かせた父が迎えてくれた。愁の父である宮琥京平は、一世一代で「ミヤコ・カンパニー」という大会社を立ち上げた社長なのだ。

「父さん、そんなにはしゃいでどうしたんだ？」

「おお、我が息子よ、よくぞ聞いてくれた！新しいのが手に入ったんだ！ここを押すとなあ……………」

はしゃいでいる父をよそに、愁は一人、あきれていた。

京平は新しいものに目が無いのだ。しかし、「研究材料」と称し、買い集められたものは、すべて京平のおもちゃになっていることは言うまでもない。京平いわく、「遊び心が世界を変える最大の技術」なのだそうだ。

そんな父を一人残し、愁は自分の部屋へ行った。彼の部屋は年頃の少年とは思えないほど整理整頓されていたが、よく見れば今流行りのマンガやCDなど、置いてあるものは大差ないようだった。

すぐに宿題を済ませると、もう夕食の時間だった。夕食を食べに行くと、すでに用意がされていた。父はもう席についており、母も愁がきたので席に着こうとしていた。

余談だが、この家、金持ちには珍しくお手伝いさん、いわば、召使いのようなものがない。

普通、金持ちの家は、しっかり教育された召使いがいて、何から

何まで、全てやってくれるが、この宮琥家にはそれがいないのである。本人たち曰く、「そんなもの、必要ない」のだそうだ。

さて、愁たちは食事が終わり、個々の時間（新商品を妻に見せてそれを力説するなど）へと戻っていった。

愁は部屋に戻ったものの、やることがなく、ベッドでゴロゴロしていた。

そうしているうちに眠ってしまったらしい。目が覚めると、すでに真夜中だった。ふと、窓の外に目をやると、奇妙な光景が広がっていた。

緑の光。

所狭しと視界に広がっているのは、それだった。空へ突き抜けるような光の筋は何故か愁を引き付けた。目をそらそうとしてもせられない、不思議な何かが光とともに発せられているようだった。

次の瞬間、視界いっぱい緑色が広がり、愁は光の中に吸い込まれていった。

固く閉じていた目を開くと、そこは真っ白な空間だった。先ほどの緑の光もない、“無”の空間。

一面の白い世界に驚いていると、声をかけられた。

「いらっしやい」

「!？」

声がしたほうを見ると、一人の女性が立っていた。少女といったほうがいいだろうか、よく見れば日本人ではなかった。長い透きとおるような金の髪を少し高めの位置で結っている。緩くウェーブのかかったその髪は風もないのになびいているようだった。顔は少し幼そうだったが、青く明るい瞳は真剣な眼差しで愁を見据えていた。

愁が混乱しながらも状況を整理しようとしていると、彼女が話し掛けてきた。

「貴方をずっと待っていた」

「……俺のことを知っているんですか？」

「ええ。昔から」

（この人は何を言っているんだ？ていうか、それ以前に誰なんだ！？）

「あの、俺は貴女が誰か分からないんですが……」

「私の名前は、リア・ストラス。何者かは……そのうち分かるわ」

「どういう……」

「今は時間が無いの。今から話すことをよく聞いて」

「？」

少女　リアの話をまとめるところだった。

「光と闇が動き出した」

と。

「光と闇は紙一重。どちらかが存在すれば、もう一方も必ず存在します」

「……どういう意味ですか？」

「光と闇は対になるもの。光の中の闇だからこそ美しく見え、闇の中の光だからこそまばゆく輝くのです」

愁の質問にリアはスラスラと答えた。しかし、急なことで頭が混乱している愁はいまいち理解できなかった。いや、愁でなくとも、この場所にいるのが彼でなくとも彼女が言っていることを理解できる人間は早々いないだろう。

「さあ、ムダ話をしているヒマはありません。自分を見失わないで正しいと思ったことは最後まで貫き通しなさい。貴方はきつと、鋭い刃となりえるでしょう。しかし、どんなに鋭くても、脆い部分はあるはず。でも心配しないで。きつと大丈夫だから」

。

忘レナイデ。イツモ貴方八独リジャナイコト……

リアが早口でまくし立てるように言い終えると、愁は氣を失うようにして現実世界へ引き戻された。

その後は目が覚めることもなく、ただただ眠りつづけた。

次の日

愁の脳裏には緑色の光が焼きついていて離れなかった。今まであんなものを見たことがなかったし、そんな話さえ聞いたこともなかった。

あの少女だつて未だに愁には心当たりがないのだ。学校でも見た覚えはないし、親戚でもないだろう。

あの光を見たのは自分だけなのだろうか？あの少女と自分とのつながりは？同じ経験をした人がいれば相談もできそうなものだが、生憎そんな人物に心当たりはないし、誰かに話したところでただの夢だと思われるだろう。

夢にしてははつきりしすぎる不思議な光景が忘れられないまま、いつものように瑠璃の家に向かった。いつものように玄関のチャイムを押し、待っていた。するといつもとは違う人物が現れた。

「あら、愁くん。おはよう」

「マリーさん、おはようございます。ところで、瑠璃はどうしたんですか？」

「まだ起きていないのよ。いつもなら飛び起きているところなのに、めずらしいわねえ、と言いながらも、マリーは不思議そうに首をかしげる。確かに瑠璃は、準備には手間どうものの、寝坊はしたことがなかった。どちらかというと、起こされるのはマリーの方なのだ。瑠璃はどちらかと言えば低血圧なのだが、それを自分でも理解しているためなるべく早く起きるようにしているのだ。なので、寝

坊するということはよっぽどのがない限りはありえないことであつた。

「昨日だっていつもどおりの時間に寝ていたのにおかしいわね・・。ちよつと様子を見てくるわね」

「あ、俺もいつていいですか？」

「ええ、願ひするわ」

愁とマリーは瑠璃の部屋へと向かつた。

「瑠璃？入るわよ？」

コンコンとノックをし、ドアを開けると、瑠璃はベッドの中で寝ていた。マリーがゆすつて起こすと、瑠璃はすぐに起きた。そして寝坊したことに気づくと、いつもより眠そうな両目をこすりながら急いで用意をし、何事もなかったかのように道場へと向かつた。

「お前、大丈夫なのか？何かあつたか？」

「ううん。ちよつと変な夢見ちやつただけだから」

愁が問い掛けても瑠璃は曖昧な返事しか返さなかつた。“夢”という言葉に少々疑問を抱きながらも、それ以上追求することではなく、愁は空手に集中することにした。

4・Wind

少年の中でなにかが動く
少女の中でなにかが蠢く

4・Wind

それから数日がたった。

瑠璃も愁も普通に毎日を過ごし、世間も何事も無く、ゆったりとした時間が流れていた。

その日の1時間目は、体育だった。グラウンドで走り幅跳びの授業だったので、各々準備をしていた。

「瑠璃って走り幅跳び得意だったよね。小学校のときも凄かったじゃない。3m70cmだったけ？」

「そうだけど。でも、跳ぶだけよ？簡単じゃない」

「それは瑠璃くらいよ」

瑠璃は親友である由稀と話していた。由稀は、小学3年のときに瑠璃のクラスに転入してきて、それ以来、瑠璃とはずっと同じクラスである。一見おとなしい印象を受けるが、大きな瞳には強い光が宿っていて芯の強さを感じさせる。

「じゃあ、今年は4m目指しなさい」

「それはいくらなんでもムリでしょ。身長約2・5倍よ」

「いや、瑠璃の超人的な運動神経なら余裕だわ」

「アンタねえ……」

そうこうしているうちに、準備は終わったようで、みんな練習し始めていた。瑠璃と由稀も列の後ろに並び、順番を待った。

瑠璃本人は自覚していないようだが、由稀のいうとおりかなり運動神経が良かったため、毎年走り幅跳びで驚異的な記録を出している。

もちろん走り幅跳びだけでなくその他のほとんどのスポーツもほとんどこなしてしまうため、中学に入学したての頃は毎日運動部（主に陸上部）に追い掛け回されていた。

瑠璃と由稀が話をしていると、瑠璃の後ろに愁が並んできた。

「今年は何m跳ぶ気だ？」

「別に何mでもいいでしょ。それより、男子も幅跳びなの？」

「まあね。もう、先生たち、ラブラブだよ」

愁の視線の先には男子と女子の体育教師がイチャついていて。先月結婚したばかりの新婚教師たちは幸せオーラ全開で周りの目をまったく気にしていないようだった。

「まあ、新婚なんだし放っておきましょう」

「別に口出しする気もないしね」

「瑠璃、次、アンタの番よー!!」

新婚夫婦について2人が語り合っていると瑠璃の順番がきたらしく、一足先に飛び終わっていた由稀が向こうから叫んでいた。

「OK、今行くー!」

そう言って、瑠璃は勢いよく走り出し、地面を強く蹴った。足が地面から離れ、体が宙に浮く。

そのとき

「キャーーーーー!!」

「うわあっ」

「何だ!？」

突風が吹き荒れ、砂が舞い上がりほとんど前が見えなくなった。砂とともに用具や花壇に植えられた植物たち、さらには校庭にいた生徒たちも何人かが宙を舞い、平和な体育の授業が一瞬にしてパニックに陥った。

瑠璃もすでに宙に浮いている状態だったので、突風が吹くほうへ飛ばされていく。何かに捕まりたくても風が強すぎて目が開けられ

ず、瑠璃にはなす術もなかった。

「瑠璃！！」

薄目を開けて瑠璃が飛ばされているのを見た愁は、瑠璃の腕をつかみ、飛ばされないように引っ張った。しかし、風が強すぎるため手が離れそうになるし、瑠璃をつかんでいると愁まで飛ばされそうになる。

愁が懸命に瑠璃を引っ張っていたそのとき、一際強い風が吹き、愁の足は地面から離れ、2人とも飛ばされていった。どこに行くとも知れない突風は、それでいて何か目的があるように感じられた。しかし、それについて2人が深く考えている余裕はなかった。

2人が最後に見たのは、真っ黒な空間に風が吸い込まれていく光景だった。

5・Unknown world

ヒトは知らない世界へ行くと
どうなるのだろう

5・Unknown world

気がつくと2人は漆黒の闇の中にいた。

目を開けた瑠璃は、一瞬慌てたが、先ほどのことを思い出し、そうか、と納得した。

（私たち、あの変な穴の中に吸い込まれたのか・・・）

ふと隣を見ると、愁はまだ気を失っているようだった。瑠璃は急に心細くなり、愁を起こすことにした。

「ちよつと、起きて！」

数回揺さぶると、愁はピクツと動いて目を覚ました。あたりを不思議そうに見回したが、愁も先ほどのことを思い出したようで、瑠璃のほうを見て言った。

「俺たち、あの空間の中に吸い込まれたみたいだな」

「そうみたい。それより、ここ、どこかしら？宇宙？」

「そんなわけないだろ。息もできるし、風が吹いてる」

言われてみればそうだった。風は絶え間なく吹いていた。いつでも、先ほどのような強い風ではなく、弱いそよ風のようなもので、愁の頬を撫で、瑠璃の髪を優しくなびかせる。瑠璃にとっては心地よいものだった。

「何か聞こえるか？」

「ううん、全然。愁は？」

「俺も何にも」

見渡すかぎりあたりは闇。「一寸先は闇」とはこのことが、と愁は思った。

「とりあえず、ここから抜け出さないと。なんだか嫌な感じがする」
「そう？風が吹いてて気持ち良いじゃない」

「じゃあ、瑠璃だけここに住めばいいじゃないか」

「それは嫌」

そして出口を探すことにした。しかしどこをどう探せばいいのかわからない。なにせ、自分たちは見えるものの、周りは全て闇に包まれているのだから。たとえこの場所に何かあったとしても、それが自ら光を発していなければ彼らが見つけることは出来ないだろう。しかし、ずっと突っ立っているわけにもいかないので、少し歩いてみることにした。地面は固く平らで、壁のような障害物はないと思われた。とはいっても、暗がりを手探りで歩き回るといふのは思いのほか難しいものである。何も無いところで瑠璃が転びそうになったり、それに驚いて愁まで転びそうになったりもした。

歩き出してからかなり時間がたった。しかし、探しても探しても一向に出口らしきものは見当たらない。ここから一生出れないのだろうか。食べ物や飲み物もないままどれくらい生きられるのだろうか。考えれば考えるほど悪いほうに考えてしまう。いつのまにか2人の会話は少なくなり、歩く速さも遅くなっていった。

歩き疲れ、気分も沈んでいた2人は一度休むことにした。しかし話すこともなく、何かすることもないのでただただ時間に身をゆだねる。

愁は数日前に見た夢の中の少女を思い出していた。あの口ぶりは、何か自分の周りに普通じゃないことが起こる、そんな感じのものだった。このことを言っていたのだろうか？しかし光と闇がどうかかいていたが、周りには闇しかないではないか。となると別のことなのだろうか。これから先も不可解な出来事が自分の周りで起こるのかもしれない。何が？どれくらい？考えれば考えるほど謎は増すばかりだった。

ふと瑠璃があたりを見回すと、何やら紫色に光る物体が目に入っ
た。

「ねえ、あれ、何かしら？」

「え？何のことだ？」

「あれよ。見えないの？紫色に光ってるやつ」

「紫？何言ってるんだ？何もないじゃないか」

「もう、しょうがないわね」

「あ、おい！瑠璃！」

瑠璃は、愁が止めるのも聞かず、紫色の物体に向かって歩いてい
った。後ろからは、愁がついていく。

紫色の物体は、近くで見ると、宝石のように美しく、固そうな石の
ようなものだった。

「ほら、これよ」

「・・・・・・何だよ」

「あんた、まさか見えないの！？ここまで来て失明でもしたの！？」
「いや、瑠璃のことは見えるよ。自分自身も。でも、その『紫色に
光ってるやつ』は見えない」

確かに、愁は、失明などしていなかった。だいたい、彼の視力は
2.5なので、短期間で失明する可能性は低い。

「でも、これ、本当に何なのかしら？」

瑠璃がそう言ってそれに触れた瞬間

「うわあっ！！」

「瑠璃っ！？」

彼女はその中に吸い込まれるようにして、消えてしまった。

紫色に光る物体は見えなかったものの、瑠璃が消えていく様子は
見えた愁は、あたりを見回したが、彼女の姿はどこにも無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8595f/>

LooP

2010年11月4日02時19分発行